

## モーツアルトの街

モーツアルトが1784年9月29日から1787年4月24日まで妻コンスタンツェと住み、「ファイガロの結婚」その他の作品を作曲した、ドームガッセ5番地にあるアパート「ファイガロハウス」は、普段からモーツアルト博物館のひとつとして展示品と共に一般公開されている。

1991年のモーツアルト没後200年祭にそなえて傷んでいるところを補修する工事が開始され、建物の中の塗り壁を洗っていたところ、その下地からモーツアルト時代に装飾として描かれていた壁絵がみつかった、とかで、工事は暗礁に乗り上げてしまった。この建物は現在個人の持ち物になっているが、文化財保護法のもとに管理されており、おいそれと持ち主の自由に改修工事を行うことはできない。何をどのような方法で修復するか、との綿密な計画書を管轄の役所に提出し、許可を得なければ、たとえばどれほど隙間

風が吹き込もうと、窓枠ひとつ交換することさえ許されないのだ。

その建物を使用している当事者にとつては不自由でも、この厳しい規制があつてこそ、美しい街の姿がそのまま後世に残されていくのだ。

ただでさえも第2次世界大戦の際の爆撃で壊されてしまったものが多い。残っているものを保存していこう、という心構えと並び、それらの補修作業などにかけられる公費も毎年莫大な額となっている。

しかしウィーンをはじめ、ヨーロッパの古い街は実に面白い。こうした歴史的な史跡が200年以上もの時間をこえて保存されている、という事自体は特にめずらしい事ではないにせよ、その場で今も昔もまったく同じ様に市民の日常生活が営まれている、というのが貴重なのである。石で作られた街が持つ特徴だろう。

モーツアルトに限らず、そうした歴史上の人物が実際に登り降りした階段がそのまま現在も使われ、その石の減り具合に時間の流れを感じる。住居の窓から眺める景色にも、当時との差がさほどあるとは思えない。同じ教会の同じ空間で、今も昔も変わらずミサが営まれ、結婚式が挙げられ、葬儀

が行われる。同じパイプオルガンの響きを、今も普段の生活の一部として享受できる。

たとえば、有名な聖シュテファン大寺院。ここはモーツアルトとコンスタンツェの結婚式が行われたばかりか、夭折したモーツアルトの葬儀がとり行なわれた場所でもある。

モーツアルトが生まれた街、ザルツブルクも例外ではない。

モーツアルトが生まれた家はゲトライデガッセという、昔からの繁華街にある。ショーウィンドーの中身とその飾りつけこそ違つていても、「ああ、モーツアルトもこの扉を出たところでこういう景色を見てたんだな。小さい頃はザルツァッハ川のほとりで遊んだ事も多かったんだらうな」などと、容易に当時に思いを馳せることができる。

モーツアルトの生家からザルツブルクの中央を流れるザルツァッハ川までは数十メートルの距離しか離れておらず、その水は今も昔と変わらず流れ続けている。

モーツアルトは幼少の頃から父親レオポルトに連れられてヨーロッパ各地を旅行していた。当時の旅行は馬車を利用するのが普通だ

ザルツブルクの中央を流れるザルツァッハ川



ザルツブルクのモーツァルト生誕の家



モーツァルトが何回も通ったザルツブルクの大聖堂



ウィーン・フォルクスガルテンにあるモーツァルト像



ザルツブルクの三位一体教会

った。  
ザルツブルクとウィーンとはほぼ300キロほど離れており、今日では車で約2時間半、鉄道でも3時間で行くことができる。その距離を、モーツァルト親子は数日間かけて移動した。旅の疲れは相当なものだったろうが、車窓から見える景色はのんびりと、それこそ新しい作品の構想を練るにはもってこいの雰囲気だったのでないだろうか。

現代は電話あり、ファックスあり、旅行するのも車で、飛行機でと、ずいぶん便利になり、時間の節約もできるようになった。  
しかしそれとひきかえに、自分だけの世界、あるいは自分だけの時間というものも、いつしか失われてしまったような気がする。ふらりと数日音信不通の旅行をする、という勇氣さえもが、現代人にはなくなってしまうところ。車の中ばかりか、ちよつとそこまで散歩に行くのにも携帯電話を手

放せなくなってしまった人さえ少なくない。  
そんな人々にも平等に語りかけてくれるモーツァルトの音楽の魅力とはいったい何なのだろう。ハイテク時代、コンピューターなしにはすまなくなりつつある日常生活があるからこそ「モーツァルト」なのだ、という声も高い。ワーグナーが大っ嫌い、という人間はいても、モーツァルトだけは勘弁願いたいという声はまだ耳にしたことがない。

## 音楽家の史蹟

- モーツァルト
- シューベルト
- ベートーヴェン
- × その他

詳しい住所は付録(P.129～126)参照



ウィーンの音楽家史蹟地図